

# 複合動詞「～続ける」について

廖 紋淑

キーワード 複合動詞、「～続ける」、「日本語母語話者」、「中国語学習者」、  
アンケート調査

## 1. はじめに

本稿は日本語の複合動詞「～続ける」の意味について分析したものである。また、日本語母語話者と中国語を母語とする上級日本語学習者に対して文法性判断テストを行い、「～続ける」のV1とV2の結合意識の違いについて分析した。

## 2. 先行研究

### 2-1 「～続ける」の意味・用法を考察したもの

「～続ける」の意味特徴について論じた先行研究には、岩崎(1988)、金(2002)、黄(2004)がある。岩崎(1988)は「～続ける」の意味として「持続過程の動作・出来事」、「同時」、「終了」、「開始の局面」を提示し、それぞれ次の例を挙げている。

- (1) 吉原まつ子はずっと漫画の本を読みつづけている。(持続過程の動作・出来事)
- (2) 私は娘の片腕を静かに廻しながら、それらにゆらめく光りとかげの移りをながめつづけていた。(同時)
- (3) 「…そして、いろいろと弁解したのですが、岩津はなおも吐き続け、あとは口もきかずに家に帰ってしまった。」(終了)
- (4) 終わってからも、闇の中で、彼女は泣き続けた。(開始の局面)

しかし、例文(2)、(3)は文脈の中にそれぞれ「ながら」や「あとは」があるため「同時」や「終了」の意味を表すのであり、「～続ける」自体に「同時」や

「終了」の意味があるとは考えにくい。この点について、さらに詳しく検討したのは金（2002）である。金（2002）は「～続ける」の意味は「持続過程の動作・出来事」、「同時」、「終了」、「開始の局面」の四つに分類されるのではなく、「前の動作のつづき」、「一定の期間における持続」の二つに分類されるとし、「「～続ける」の基本的な意味は「一定の期間における持続」であり、「前の動作のつづき」は一定の条件のもとで生じる派生的な意味である」としている。これに対して、黄（2004）は「～続ける」の一般的な意味について、「することを終わらせないようにする（することが終わらない）」と述べている。各先行研究の分析によると、「～続ける」の意味特徴はある時点において行われた動作を終わらせないように持続することであるとしている。

## 2-2 「～続ける」の前項動詞を考察したもの

「～続ける」の前項動詞について指摘した研究として、寺村（1984）、森山（1986）、黄（2004）がある。寺村（1984）は、「～続ける」は「継続動詞につくのがふつうで、状態動詞や瞬間動詞にはつかない」と述べ、(5)、(6)の例文を挙げている。確かに、「～続ける」の前項動詞は継続期間を持つ動詞に限られる。しかし、事例では(7)のように「寒くなり続ける」という文も出現する。

- (5) 寒くなり始めた。(寺村1984:177)
- (6) \*寒くなり続けた。(寺村1984:177)
- (7) どんどん寒くなって、このまま寒くなり続けると来年の8月頃には名古屋も北極並の寒さですね。

([http://blog.goo.ne.jp/kibunya\\_83/](http://blog.goo.ne.jp/kibunya_83/)) 2009/12/10

(7)では気温が下がって行くという天気の変化過程が捉えられている。冬の名古屋は冬が深くなるとともに寒さもさらに継続して変化していくという文脈があるため、(7)のように「寒くなり続ける」の許容度も高くなると考えられる。また、森山（1986）には、「\*死に続けた、…が言えないように、永続的（非可逆的）な変化の場合は、変化結果においても持続性がない」という指摘があるが、事例では(8)のように「死に続けた」という表現も出現する。

- (8) 喫煙による癌は実験動物で再生させるのが難しいため、喫煙には発癌性がないと考えられた。多くの人が喫煙を続け、癌で死に続けた。

(<http://www.arcj.info/jfma/harms.html>) 2009/12/10

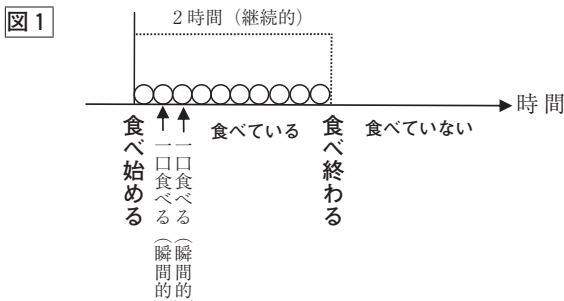
確かに、「死ぬ」のような変化の結果を表す場合、「～続ける」とは共起しにくい(8)の場合は、複数的な行為の文脈であることが分かる。「毎年連続的に人が死ぬ行為を繰り返す」という解釈ができるため、言えるようになるのではないかと考えられる。

本研究では「～続ける」の表現の特徴を明らかにするため、コーパスとアンケートを利用して前項動詞の違いを分析する。また、日本語母語話者と日本語学習者の使い分けの違いについて分析する。

### 3. 「動作動詞」と「変化動詞」

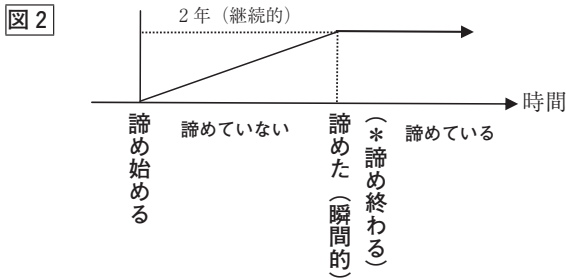
金田一(1950)は動詞を大きく継続動詞と瞬間動詞に分類した。例えば、「食べる」は期間副詞「2時間」を伴って、「2時間食べる」と言えるため継続動詞とされている。しかし、「食べる」は(9a)のように動作を継続的に続けることもあるが、(9b)のように瞬間的に動作を終えることもある。確かに「食べる」は食べ続けようと思えば食べ続けられるという意味では継続動詞かもしれないが、見方を変えて一口一口瞬間的に食べる動作が重なったものであると考えれば瞬間動詞であるとも考えることも可能である。例えば、図1の「2時間」は晩ご飯を食べ始めてから食べ終わるまでに要する時間を表す。「食べ続ける」は、2時間の中で「食べる」という瞬間的な動作を何回も繰り返すことにより、全体で動作が継続している。

- (9) a. 彼は晩ご飯を2時間で食べた。(継続的の出来事)  
 b. 彼はチョコレートを一口で食べた。(瞬間的の出来事)  
 c. 彼は晩ご飯を2時間食べ続けた。



一方、「諦める」は「\*長い間諦める」と言えないように継続性を持たないため一般に瞬間動詞とされている。しかし、「諦める」は(10a)のように瞬間的にその気持ちになる場合もあるが、(10b)のように諦め始めてから完全に諦めるまでの時間が必要とされる場合もある。確かに諦める気持ちを完全に捨て去るのは最後の瞬間かもしれないが、見方を変えて諦める気持ちが生じてから完全に諦めるまでに至る過程が継続すると考えれば継続動詞であるとも考えることも可能である。

- (10) a. 彼は試験問題を見た瞬間すぐ諦めた。(瞬間的出来事)  
 b. 彼は彼女のことを2年かけてようやく諦めた。(継続的出来事)



したがって、本稿では動詞を「継続動詞 vs. 瞬間動詞」の対立ではなく、奥田(1977)の言うように「動作動詞 vs. 変化動詞」の対立として捉えたほうがよいと考える。これについて定延(2005)は動詞には動作を表す「動作動詞」と変化を表す「変化動詞」があるとして、次のような「逸脱仮説」を提唱している。

#### 逸脱仮説

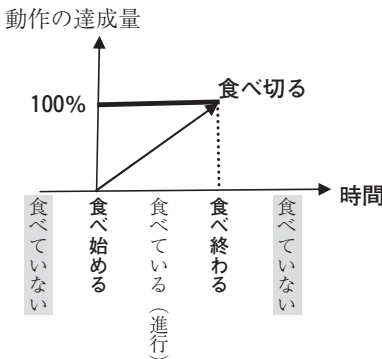
「動作とは、当該のモノのデフォルト状態からの逸脱であり、これを表すのが「動作動詞」である。変化とは、当該のモノの直前状態からの逸脱であり、これを表すのが「変化動詞」である。つまり動作も変化も基準からの逸脱であり、両者の違いは、基準が「当該のモノのデフォルト状態」か「当該のモノの直前状態」かの違いである」(定延2005: 2)

この分類に従うと、「食べる」は食べた後に元の何も「食べていない」状態に

戻るため「動作動詞」に分類される。一方、「諦める」は諦め始めてから諦め切るまでに主体の状態が変化していく。そして諦め切った後には、主体は元の「諦めていない」状態から「諦めている」状態へと変化するため、本稿では「変化動詞1」に分類される。両者の違いを図3、図4に示す。図3は「食べていない→食べ始める→食べている→食べ終わる(食べ切る)→食べていない」という過程をたどり、「～し切る」までの状態を「～している」と言い、「～し切った」後の状態を「～していない」と言う点で特徴がある。この場合、継続相の「している」は進行の意味を表し、その動作の継続を「～続ける」とも共起できる。(「～切る」については杉村(2008)を参照)

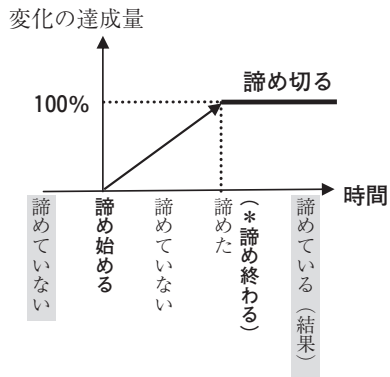
これに対し、図4は「諦めていない→諦め始める→諦めようとしている(まだ諦めていない)→諦め切る(\*諦め終わる)→諦めている」という過程をたどり、「～し切る」までの状態を「～していない」と言い、「～し切った」後の状態を「～している」と言う。この点で「食べる」とは異なる。すなわち「諦める」という変化は一旦達成されたら(諦めた)それ以上変化が進展せず、諦めている状態が維持されている。その変化が達成した時から「諦めていない」という気持ちが完全になくなり、「諦めた」ことになる。一旦、諦めた後はそのまま諦めたままなので、「\*諦め続ける」という事態に「継続」は考えにくいのである。

図3 動作動詞のアスペクト



動作前：食べていない  
動作後：食べていない

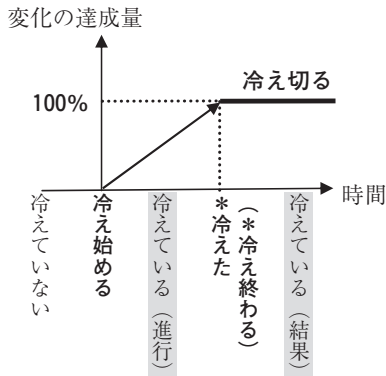
図4 変化動詞1のアスペクト



動作前：諦めていない  
動作後：諦めている

また、動詞にはこの他に「冷える」のような「変化動詞2」を設定する必要がある。例えば「冷える」は「冷えていない→冷え始める→少し冷えている（\*まだ冷えていない）→冷え切る（\*冷え終わる）→冷えている」という過程をたどる。これは冷え切った後に冷えた状態が続くという点では「変化動詞1」に似ている。しかし、冷え切る前の状態を「冷えていない」とは言えない点で「変化動詞1」とは異なっている。両者の違いは、「冷える」のような「変化動詞2」は当該の変化が始まった時点ではまだ完全にその状態になっておらず、「～し切った」時点でようやく完全にその状態になるのに対し、「冷える」のような「変化動詞2」は当該の状態が発生した時点ですでにその状態になっているという違いがある。この場合の継続相の「している」は両義的である。「冷え切る」までの状態を「冷えている」と言い、「冷える」量が変化する過程を進行的に捉えることができる。また、「冷え切った」時点でようやく完全に「冷えている」という状態になり、変化した結果を静的に捉えることもできる。そうすると「冷え続ける」の場合は、「冷える動きの持続」と「冷えた結果の維持」の二つの意味に解釈することができる。

図5 変化動詞2のアスペクト



動作前：冷えていない

動作後：冷えている

以上のことから、本稿では「～続ける」の前項動詞が「食べ続ける」のように「動作動詞」の場合は「動作の継続」を表し、「変化動詞1」の場合は「\*諦め続ける」のように基本的に「～続ける」と共起しにくいと考える。「変化動詞

2」の場合は「冷え続ける」のように「冷える動きの持続」と「冷えた結果の維持」の二つの意味を持っている。このような違いは、前項動詞の意味の違いによるものであり、「～続ける」自体は当該の事態を継続することを表す表現であると考えられる。<sup>1</sup>

#### 4. コーパス調査の概要

本稿ではインターネットのWWWページをコーパスとして利用した。この方法に対しては、「データの保存性が悪い」、「不自然な表現がまじる」などの批判がある。しかし、大量のデータを扱うことができるため、言語研究に有用なコーパスとして活用できると考えられる。以下、本稿のWWW検索について示す。

検索エンジン：「Google」(<http://www.google.co.jp/>) のフレーズ検索を使用する。  
検索対象：883語の動詞と下記「～続ける」の結合を検索した。

表記：「～続ける」は漢字表記のみ検索した。それぞれ「～する」、「～した」、「～して」、「～しない」、「～しなかった」、「～します」、「～しました」、「～しません」形のヒット数を調べた。以下の表の数字はそのヒット数を合計した数である。

調査の結果、「～続ける」はV1には動作動詞に使用が集中しており、変化動詞はあまり使用されていないことが分かる。このうちヒット数の多いもの上位100語を表1に示す。またヒット数の少ないもの上位100語までを表2に示す。

表1 「～続ける」と共起しやすい動詞上位100語

順位	V1	ヒット数	順位	V1	ヒット数	順位	V1	ヒット数	順位	V1	ヒット数
1	増える	100,604	26	降る	21,330	51	流れる	12,406	76	呼ぶ	8,764
2	待つ	94,165	27	求める	20,187	52	鳴る	12,170	77	投げる	7,976
3	使う	91,394	28	送る	20,021	53	取る	11,758	78	信じる	7,585
4	走る	89,272	29	読む	19,994	54	負ける	11,547	79	変わる	7,262
5	生きる	72,000	30	眠る	19,163	55	聞く	11,403	80	登る	7,159
6	持つ	71,128	31	出す	19,152	56	語る	11,178	81	祈る	7,157
7	見る	54,740	32	乗る	19,030	57	悩む	10,711	82	上げる	7,152
8	守る	54,595	33	思う	18,757	58	咲く	10,709	83	残る	6,952
9	書く	44,222	34	行く	17,899	59	輝く	10,334	84	会う	6,908
10	作る	41,415	35	住む	17,019	60	出る	10,133	85	掛ける	6,717
11	飲む	41,098	36	考える	16,796	61	流す	10,020	86	発表する	6,653
12	言う	39,576	37	変化する	16,364	62	攻める	9,908	87	使用する	6,637
13	受ける	38,671	38	動く	15,867	63	闘う	9,735	88	燃える	6,614
14	振る	33,354	39	泣く	15,214	64	立つ	9,698	89	叩く	6,398
15	働く	30,817	40	存在する	15,183	65	伸びる	9,668	90	進む	6,344
16	戦う	29,112	41	放す	15,007	66	探す	9,417	91	責める	6,194
17	食べる	28,244	42	買う	14,778	67	踊る	9,414	92	逃げる	5,992
18	与える	27,976	43	居る	14,543	68	下がる	9,373	93	座る	5,923
19	押す	26,590	44	成長する	14,512	69	抱く	9,176	94	動かす	5,880
20	採る	26,017	45	通う	14,456	70	笑う	9,119	95	寝る	5,741
21	探す	24,506	46	愛する	14,431	71	しゃべる	9,045	96	上がる	5,719
22	訴える	24,300	47	叫ぶ	14,380	72	降りる	9,027	97	生む	5,701
23	勝つ	24,198	48	打つ	13,999	73	売れる	8,976	98	発展する	5,616
24	歩く	23,543	49	追う	13,917	74	減る	8,879	99	散る	5,437
25	歌う	22,248	50	回る	12,706	75	払う	8,772	100	殴る	5,386



表2 「～続ける」と共起しにくい動詞上位100語

順位	V1	ヒット数	順位	V1	ヒット数	順位	V1	ヒット数	順位	V1	ヒット数
1	妬ける	0	19	劣る	1	44	生る	3	70	治る	6
〃	出掛けする	0	〃	纏まる	1	〃	混じる	3	〃	分かる	6
〃	改まる	0	〃	終える	1	53	差し上げる	4	78	居る	7
〃	因る	0	〃	興る	1	〃	助かる	4	〃	印す	7
〃	要る	0	〃	興す	1	〃	交ぜる	4	〃	雇る	7
〃	いらっしやる	0	〃	似る	1	〃	褒める	4	〃	障る	7
〃	都合する	0	〃	帰国する	1	〃	中止する	4	82	覚める	8
〃	承知する	0	〃	支度する	1	〃	溶く	4	〃	休める	8
〃	当てる	0	〃	知れる	1	〃	近寄る	4	〃	醒ます	8
〃	諮る	0	〃	馴れる	1	〃	同情する	4	〃	勝る	8
〃	合計する	0	36	失礼する	2	〃	出発する	4	〃	異なる	8
〃	間に合う	0	〃	迷惑する	2	〃	止む	4	〃	参る	8
〃	予定する	0	〃	乱暴する	2	〃	表れる	4	〃	安心する	8
〃	裁つ	0	〃	済ます	2	〃	締まる	4	89	明ける	9
〃	見付かる	0	〃	覚ます	2	65	妬く	5	〃	謀る	9
〃	交ざる	0	〃	決心する	2	〃	食事する	5	91	帰す	10
〃	入学する	0	〃	潤れる	2	〃	弱める	5	〃	下さる	10
〃	交じる	0	〃	飽きる	2	〃	温まる	5	〃	代える	10
19	敗る	1	44	予防する	3	〃	暖まる	5	〃	外出する	10
〃	選挙する	1	〃	足りる	3	70	手術する	6	95	改める	11
〃	止す	1	〃	召し上がる	3	〃	用心する	6	〃	腰掛ける	11
〃	依る	1	〃	見付ける	3	〃	なさる	6	〃	嵌める	11
〃	取り換える	1	〃	致す	3	〃	纏める	6	〃	卒業する	11
〃	放れる	1	〃	漏る	3	〃	焦げる	6	〃	交際する	11
〃	做う	1	〃	留学する	3	〃	点く	6	〃	仕舞う	11

これをみると、「～続ける」は「増える」、「待つ」、「使う」、「走る」、「生きる」のような動作動詞と共起しやすいことが分かる。「増える」、「減る」、「登る」、「進む」のような漸進的な量の増減を表す動詞は「どんどん増えている」のように量が変化する過程を進行的に捉える場合と、「先月と比較してけっこう増えている」のように変化した結果を静的に捉える場合がある。これらの動詞は「1ヶ月で体重が2kg増える」のようにあらかじめ設定した終了限界（こ

の場合は「1ヶ月」と共起できる。「(動作の) 限界性」について、須田(2000: 87)は、「そこにいたれば、動作の展開の過程がつきはて、それ以上展開することのできないような、動作の臨界点である」と述べている。本稿では須田の「(動作の) 限界性」を利用して、分析していく。例えば、「太郎は晩ご飯を1時間で食べた」のように「期間+で」と共起できる動詞は「限界」を持っており、「太郎は晩ご飯を1時間食べた」のように「1時間」のような「期間」を表す表現と共起できる動詞は「限界」を持っている。この観点から「増える」、「待つ」、「使う」、「走る」、「生きる」のような動作動詞は非限界動詞であることが分かる。「増え続ける」は「増える」という動きの量が変化する過程は進行的事態であるのに対し、「待ち続ける」は「待つ」という動きが一旦成立された後、ずっとその状態が維持される。一方、次の(11)の「鳴る」も動作動詞であるが、「増える」とは違い、瞬間的事態を表す。そして、「鳴り続ける」はその瞬間的事態が繰り返して行われることを表す。

- (11) 本日17:00~17:15の間、動画視聴ページを開くと19時の時報が鳴り続けるという不具合が発生しました。

(<http://blog.nicovideo.jp/niconews/2009/04/002907.html>) 2009/12/10

次に、変化動詞の「乗る」、「行く」、「出る」、「立つ」、「座る」、「寝る」は「~続ける」が言いやすい。これらの動詞が「~続ける」と共起する場合、変化動詞が動作動詞のように使われていると考えられる。例えば、動作動詞の場合は「6時間食べる」のように言えるが、変化動詞の場合は「6時間座る」のように言いにくい。しかし、「座る」は瞬間的な動きであるが、(12b)の「座り続ける」は、飛行機が飛んでから、目的地に到着するまでの6時間の中で「座る」は継続する動きであることと考えられる。

- (12) a. ? 6時間座る。  
b. 飛行機に6時間座り続けるのは、やはりつらいものでした。

次に、「愛し続ける」、「悩み続ける」についてみる。これらの動詞は人間の心理・感情を表す動詞である。しかし、「愛し続ける」、「悩み続ける」は言えるが、「飽き続ける」、「諦め続ける」は言いにくい。一般に、人間の心理・感情は、ほかの動きの動詞と違って、限界性が明確でなく、また運動性も希薄であり、過程のある出来事なのか、心的な状態の変化なのか、はっきりしない場合が多い。これらの動詞は人間の心の働きを表す内的情態動詞(あるいは心理動

詞)である。このうち「悩む」は期間副詞を伴って、「長い間悩む」、「一週間の間悩む」と言える点から見て継続性を持つため、継続性動詞であると考えられる。しかし、同じ内的情態動詞といっても「長い間気がつく」、「一週間の間気がつく」と言えない点から見て継続性を持たない、瞬間動詞である。しかし、廖(2007)でも述べているように、同じ「瞬間動詞」でも「飽きる」、「諦める」は「悩む」と同じように「～始める」と共起する。しかし「悩み続ける」が言えるのに対し、「諦め続ける」とはあまり言えない。「諦める」は「太郎が完全に諦めた」のように「完全に」と共起できることから分かるように、限界が想定できる。つまり「諦める」という変化は一旦達成された後それ以上変化が進展しない。その時から「まだ諦めない」という気持ちが完全になくなり、「諦めた」ことになる。一旦、諦めた後はそのまま諦めたままなので、「諦め続ける」という事態に「継続」は考えにくい。これに対し、「悩む」は「\*太郎が完全に悩んだ」のように「完全に」と共起できないことから分かるように、「悩む」の限界が想定できず、「悩む」という変化はどこまでも進展する。すなわち「悩み続ける」の持続する過程は変化の達成(悩んだ)が量的に累積され、生起する進展的事態である。

次に、「食べる」、「歩く」は「～続ける」と共起しやすい傾向が見られる。「食べ続ける」や「歩き続ける」は行為が継続することを表す。したがって、「～続ける」のV1に時間的に幅がある動詞が来やすい。一方、「驚く」、「喜ぶ」は「～続ける」と共起しにくいという傾向が見られる。これらの動詞は主体の瞬間的な心理変化を表すため、継続を表す「～続ける」と合わないためである。

最後に、V1に静態動詞が来る「存在し続ける」、「居続ける」についてみる。静態動詞は形態的には動詞であるが、意味的には形容詞に近い。時間的な限界を持たず、常に恒常的に存在する。「存在し続ける」、「居続ける」はそうしたV1の状態が存続することを表している。

- (13) 栄養素としての発酵食品であり続けたからこそ、今の日本酒が存在し続ける事ができたのだと思われます。

(<http://www4.ocn.ne.jp/~mannenya/>) 2009/10/12

- (14) 常に、何か新しい事に チャレンジする事こそ、豊かさの中に居続け、新しい環境やその時代での生活を得ること、営んでいくことにつながると思います。

(<http://www.ac.auone-net.jp/~wda/02about.html>) 2009/10/1

## 5. 文法性判断テストによる意識調査

次に日本語母語話者と中国語を母語とする上級日本語学習者に対する文法性判断テストの結果を分析する。日本語母語話者および日本語学習者が「～続ける」について、どれぐらいの許容度で捉えているのかをアンケートによる文法性判断テストによって分析する。調査の概要は次の通りである。

### 1) 被験者

- ・日本語母語話者：51人（名古屋大学1年生）2008.11.18～2008.12.10実施
- ・日本語学習者：56人
  - 淡江大学日本語文学系4年生：21人（2008.9.15実施）
  - 大葉大学応用日語系4年生：6人（2008.9.16実施）
  - 静宜大学日本語文学系4年生：9人（2008.9.22実施）
  - 国立屏東商業技術学院4年生：6人（2008.9.24実施）
  - 中国のある大学の日語学院4年生：14人（2008.10.9実施）

### 2) 調査項目：

この100語は表1の分析結果を踏まえ、「～続ける」と共起しやすいものと共起しにくいものを適宜選んだ。アンケートで「タ形」を用いた理由は、「ル形」よりも「～続けた」という状況が実感されやすいからである。また、文脈なしで調査した理由は文脈がなくても、対象とした文に対してすぐ連想しやすいかどうかを調べることができるからである。

---

次の例文が言えると思う場合は○を、言えない場合は×をつけてください。

食べ続けた	( )	気になり続けた	( )
読み続けた	( )	聞こえ続けた	( )
⋮		⋮	
来続けた	( )	生かし続けた	( )

---

### 3) 調査結果

「～続ける」の許容度について母語話者の許容度が高い順に表3に示す。表3の「～続ける」についてみると、「待ち続ける」、「使い続ける」、「走り続ける」には母語話者も日本語学習者も高い許容度を示した。しかし、「眠り続ける」、「出し続ける」、「行き続ける」の許容度は、母語話者はそれぞれ88%、78%、

65%の割合であるのに対し、学習者はそれぞれ56%、35%、38%の割合で相対的に許容度が低いという結果が出た。「眠る」、「出す」、「行く」はいずれも人間の行為を表す変化動詞であるが、変化動詞「眠る」が「6時間眠る」、「1ヶ月宿題を出す」のように動作動詞のように使われている場面を想定しやすいため許容度が高くなると考えられる。基本的に変化後の結果の続きを表す。このことから、母語話者は「～続ける」は動作動詞につくという法則を身につけているが、学習者はそれを身につけていないことが分かる。

表3 「～続ける」の許容度

	V 1	ヒット数	日本人	学習者		V 1	ヒット数	日本人	学習者
1	待つ	94,165	92%	85%	11	歌い	22,248	98%	91%
2	使う	91,394	98%	73%	12	読む	19,994	100%	91%
3	走る	89,272	100%	87%	<b>13</b>	<b>眠る</b>	<b>19,163</b>	<b>88%</b>	<b>56%</b>
4	持つ	71,128	92%	69%	<b>14</b>	<b>出す</b>	<b>19,152</b>	<b>78%</b>	<b>35%</b>
5	見る	54,740	94%	76%	15	思う	18,747	80%	93%
6	守る	54,595	90%	84%	<b>16</b>	<b>行く</b>	<b>17,899</b>	<b>65%</b>	<b>38%</b>
7	書き	44,222	98%	95%	17	住む	17,019	86%	76%
8	作る	41,415	92%	76%	18	考える	16,796	94%	96%
9	言う	39,576	92%	85%	19	泣く	15,214	94%	89%
10	食べる	28,244	100%	84%	20	存在する	15,183	67%	38%

次にアンケートで母語話者の許容度が高かったもの上位25語までを表4に、学習者の許容度が高かったもの上位25語までを表5に示す。表4と表5を比べると、25語中16語（網掛けの語）が共通しており、母語話者も学習者も「食べる」、「読む」、「走る」のような動作動詞の許容度が高いことが分かる。一方、両者の差が30ポイント以上ある語（太字の語）をみると、母語話者の許容度の方が高い「信じ続ける」、「立ち続ける」、「持ち続ける」がある。「信じ続ける」、「立ち続ける」、「持ち続ける」は、動作が変化したあとの結果の継続を表す。このことから、学習者は「信じる」、「立つ」、「持つ」のような動作が変化したあとの結果の継続を表す動詞について母語話者より許容度が低くなることが分かる。

表4 母語話者の許容度上位25語

	V1	日本人	学習者
1	食べる	100%	84%
2	読む	100%	91%
3	走る	100%	87%
4	使う	98%	73%
5	書く	98%	95%
6	歌う	98%	91%
7	話す	96%	93%
8	泳ぐ	96%	73%
9	調べる	94%	89%
10	考える	94%	96%
11	語る	94%	73%
12	泣く	94%	89%
13	見る	94%	76%
14	笑う	94%	71%
15	<b>信じる</b>	<b>94%</b>	<b>67%</b>
16	<b>立つ</b>	<b>94%</b>	<b>65%</b>
17	作る	92%	76%
18	登る	92%	64%
19	言う	92%	85%
20	研究する	92%	93%
21	聞く	92%	69%
22	待つ	92%	85%
23	<b>持つ</b>	<b>92%</b>	<b>69%</b>
24	掘る	90%	76%
25	描く	90%	78%

表5 学習者の許容度上位25語

	V1	日本人	学習者
1	考える	94%	96%
2	書く	98%	95%
3	話す	96%	93%
4	研究する	92%	93%
5	思う	80%	93%
6	読む	100%	91%
7	歌う	98%	91%
8	調べる	94%	89%
9	泣く	94%	89%
10	走る	100%	87%
11	言う	92%	85%
12	待つ	92%	85%
13	悩む	84%	85%
14	食べる	100%	84%
15	燃やす	90%	84%
16	議論する	90%	84%
17	守る	90%	84%
18	震える	80%	80%
19	描く	90%	78%
20	祈る	90%	78%
21	計算する	86%	78%
22	見る	94%	76%
23	作る	92%	76%
24	掘る	90%	76%
25	住む	86%	76%

また、アンケートで母語話者の許容度が低かったもの下位25語までを表6に、学習者の許容度が低かったもの下位25語までを表7に示す。表6と表7を比べると、25語中14語（網掛けの語）が共通しており、母語話者も学習者も「目覚める」のような変化動詞や「知る」、「分かる」のように主体自身の状態変化を表す人の心的な働きを表す内的情態動詞の許容度が低いことが分かる。一方、両者の差が30ポイント以上ある語（太字の語）をみると、学習者の許容度の方が高い「気がつき続ける」がある。

表6 母語話者の許容度下位25語

	V1	日本人	学習者
100	目覚める	8%	16%
99	気がつく	8%	44%
98	分かる	8%	13%
97	本が有る	14%	20%
96	いらっしゃる	14%	22%
95	知る	16%	9%
94	澄む	18%	31%
93	飽きる	24%	35%
92	おっしゃる	27%	65%
91	失望する	31%	29%
90	治る	31%	42%
89	召し上がる	33%	42%
88	諦める	33%	16%
87	びっくりする	35%	16%
86	驚く	35%	31%
85	がっかりする	35%	33%
84	見える	35%	33%
83	腐る	35%	33%
82	惚れる	37%	44%
81	安心する	37%	31%
80	疲れる	39%	47%
79	腹が立つ	43%	45%
78	喉が渇く	43%	42%
77	散る	43%	31%
76	生かす	45%	55%

表7 学習者の許容度下位25語

	V1	日本人	学習者
100	知る	16%	9%
99	分かる	8%	13%
98	目覚める	8%	16%
97	諦める	33%	16%
96	びっくりする	35%	16%
95	本が有る	14%	20%
94	いらっしゃる	14%	22%
93	来る	45%	24%
92	出る	55%	24%
91	失望する	31%	29%
90	澄む	18%	31%
89	驚く	35%	31%
88	安心する	37%	31%
87	散る	43%	31%
86	がっかりする	35%	33%
85	見える	35%	33%
84	腐る	35%	33%
83	曲がる	61%	33%
82	飽きる	24%	35%
81	出す	78%	35%
80	覆う	59%	36%
79	聞こえる	69%	36%
78	頼る	73%	36%
77	埋める	73%	36%
76	後悔する	75%	36%

ここで「内的情態動詞+続ける」の許容度をまとめると、次の表8になる。まず、母語話者の思考動詞の許容度をみると、「信じ続ける」(94%)、「考え続ける」(94%)の許容度がいずれも高いのに対し、学習者は「考え続ける」(96%)の許容度を示したのに対し、「信じ続ける」(67%)の許容度が母語話者より低くなるのが分かる。日本語の「信じる」、「考える」は心的な状態を示す動詞であり、「長い間信じる」、「長い間考える」と言える点から見ても継続性を持っているため、その状態の持続を表すとき、「～続ける」と共起できる。しかし、

日本語の「信じる」、「考える」は中国語に訳される場合は、“相信”（信じる），“思考”（考える）である。“相信”（信じる）の場合は、心に自然に生じる静的な性質のものを示す動詞であり、“\*在相信”のように「在+V」構文で使えない。一方、“思考”（考える）の場合は、動作性が強く、頭を動かせるというような動的な特徴を示す動詞であるため、“在思考”のように「在+V」構文で使える。そのため、学習者の「信じ続ける」の許容度が低くなるのではないかと考えられる。

次に、母語話者の感情動詞の許容度に着目すると、「我慢し続ける」、「怒り続ける」、「迷い続ける」の許容度が高いが、同じ感情動詞であっても「気がつき続ける」、「飽き続ける」、「失望し続ける」の許容度が低いことが分かる。このことは、先にも述べたように期間副詞を伴って「長い間我慢する」、「一週間の間我慢する」と言える点から見て継続性を持っているため、「我慢し続ける」が言いやすくなるのに対し、「気がつく」の場合は「長い間気がつく」、「一週間の間気がつく」と言えないため、継続性を持っていないため、「気がつき続ける」が言いにくいと考えられる。このことから、いわゆる感情動詞は「～続ける」の形で言えるものは、継続する可能性があるために「～続ける」と共起しやすいのだと考えられる。母語話者はこうした特徴の違いによって、「～続ける」との共起可能性を判別している。

一方、学習者の場合は、学習者は「怒り続ける」、「後悔し続ける」、「怯え続ける」の許容度はそれぞれ53%、36%、44%であり、母語話者の88%、75%、65%に比べて低いという結果が出た。日本語の「怒る」、「後悔する」、「怯える」は心的な状態を示す動詞であり、その状態の持続を表すとき、「～続ける」と共起できる。日本語の「怒る」は中国語に訳される場合は、“生气”（怒る）である。“在生气”のように動的な特徴を持つため、「在+V」構文で使える。その場面を想定している場合であれば、「怒り続ける」の許容度が高くなる。しかし、中国語の“生气”は“很生气”のように形容詞の用法もある。この場合は「在+V」構文で使えない。“生气”（怒る）はこのように両方を兼ねることがある。実際、学習者の許容度（53%）をみると、この二つの基準で判断しているのではないかと考えられる。この点について、“害怕”（怯える）の場合も見られる。例えば、“我怕冷”とは言えるが、“\*我在怕冷”とは言えない。しかし、“你在怕什么？”の場合は動的な特徴を持つため「在+V」構文で用いられる。一方、“后悔”（後悔する）の場合は、動作性が弱く、静的な状態を示す動詞であるため、“\*在后悔”のように「在+V」構文では使えない。つまり、中国語の感情動詞の中で、物理的な動作・動きを示す「動きの最中」を表すことができない動詞の場合は、学習者も「～続ける」と共起しにくいと考えられる。



表8 「内的情態動詞」の許容度

	V1	日本人	学習者		V1	日本人	学習者
1	信じる	94%	67%	21	喜ぶ	57%	38%
2	考える	94%	96%	22	気になる	57%	38%
3	我慢する	90%	75%	23	困る	55%	62%
4	祈る	90%	78%	24	楽しむ	53%	42%
5	<b>怒る</b>	<b>88%</b>	<b>53%</b>	25	腹が減る	51%	51%
6	迷う	88%	65%	26	腹が立つ	43%	45%
7	憎む	88%	69%	27	喉が渇く	43%	42%
8	耐える	84%	76%	28	疲れる	39%	47%
9	悩む	84%	85%	29	安心する	37%	31%
10	願う	84%	49%	30	惚れる	37%	44%
11	震える	80%	80%	31	びっくりする	35%	16%
12	思う	80%	93%	32	驚く	35%	31%
13	望む	78%	73%	33	がっかりする	35%	33%
14	憧れる	76%	62%	34	見える	35%	33%
15	疑う	76%	62%	35	諦める	33%	16%
16	心配する	76%	71%	36	失望する	31%	29%
17	<b>後悔する</b>	<b>75%</b>	<b>36%</b>	37	飽きる	24%	35%
18	聞こえる	69%	36%	38	知る	16%	9%
19	<b>怯える</b>	<b>65%</b>	<b>44%</b>	39	気がつく	8%	44%
20	どきどきする	59%	40%	40	分かる	8%	13%

次に、「静態動詞+続ける」の許容度が低いものを表9に示す。「居続ける」、「存在し続ける」はWWW検索では「居続ける」(14,543件)、「存在し続ける」(15,183件)と多数出現し、母語話者の許容度はそれぞれ80%、67%であった。これに比べて学習者の許容度はそれぞれ44%、38%であった。

「居る」や「存在する」のように「テイル」形をとらない動詞が、(15)~(17)のように「～続ける」が付く場合は単なる存在の状態を表すのではなく、存在しようとする意志的行為を表し、その行為の継続を表すために、「～続ける」と共起すると考えられる。また、「居る」、「存在する」、「有る」はいずれその存在がなくなる可能性があり、変化を伴うものである。このことから「～続ける」は単に継続を表すのみでなく、変化しないことを含意する表現であることが分かる。

一方、学習者の場合に「居続ける」、「存在し続ける」、「有る」の許容度が低くなるのは、「居る」、「存在する」、「有る」のように単純状態を示す場合は、基本的には「在+V」構文は使えない。そのため、学習者は「居続ける」、「存在し続ける」、「有り続ける」が言えないと判断されるためであると考えられる。

- (15) 60分間舞台の上に居続ける。  
 (16) 地球が存在し続ける。  
 (17) 「愛」は、ただそこに有り続ける。

表9 「静態動詞」の許容度

	V1	日本人	学習者
1	居る	80%	44%
2	存在する	67%	38%
3	本が有る	14%	20%

## 6. まとめ

本稿では複合動詞「～続ける」を対象に、前項動詞の特徴について分析した。

- ① 「～続ける」と共起しやすいもの
- ・ 動作動詞（「食べる」、「読む」、「使う」）
  - ・ 人間の感情を表す動詞（「信じる」、「考える」、「我慢する」）
  - ・ 何らかの変化を持たさない限り、ずっとある状態が長く保たれる動詞（「存在する」「居る」、「憧れる」）
- ② 「～続ける」と共起しにくいもの
- ・ 変化動詞（「散る」、「冷える」、「疲れる」）
  - ・ 瞬間的で、時間の幅がない動詞（「喜ぶ」、「驚く」、「惚れる」、「来る」）

また、母語話者と学習者の許容度の違いを比較して、学習者の使い分けの違いを明らかにした。母語話者は「後悔する」、「怯える」など心的な状態の持続を表す場合は「後悔し続ける」、「怯え続ける」と言えると答えたのに対し、学習者はいずれも言えないと考えていることが分かった。それは中国語の感情動詞の中で、“后悔”（後悔する）、“害怕”（怯える）は動作性が弱く、静的な状態

を表す動詞であるため、“\*在后悔”、“\*在害怕”のように「在+V」構文では使えない。つまり、中国語の感情動詞の中で、物理的な動作・動きを示す「動きの最中」を表すことができない動詞の場合は、学習者も「～続ける」と共起しにくいと考えていることが分かる。

## 注

- 1) 本稿のコーパス調査では、「出掛ける」は1件も出現しなかった。しかし、本稿の査読者から「うちの叔母さんは、昨日は美術館、今日はコンサート、明日はショッピングと、出掛け続けている」は言えるのではないかというコメントがあった。もし、この例が言えたとすれば、「出掛ける」という行為が習慣的になり、やめられなくなるという意味になる。つまり、「～続ける」は単なる継続ではなく、やめられないという意味である。

## 参考文献

- 岩崎修 (1988) 「局面動詞の性格－局面動詞の役割分担－」『武蔵大学人文学会雑誌』20-1、武蔵大学、pp.81-104
- 奥田靖雄 (1977) 「アスペクトの研究をめぐって－金田一的段階－」『国語国文』8、[奥田靖雄 (1985) 『ことばの研究序説』むき書房、pp.85-104に再録]
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15、[金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』むき書房、pp.5-26に再録]
- 金美仙 (2002) 「現代日本語の複合動詞「～しつづける」のアスペクト性について」『言語・地域文化研究』第8号、東京外国語大学大学院地域文化研究科、pp.153-177
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト－現代日本語の時間の表現－』ひつじ書房
- 黄文溥 (2004) 「シツツケルの意味分析」『世界の日本語教育』14、国際交流基金日本語事業部、pp.149-165
- 定延利之 (2005) 「日本語の動作動詞と変化動詞」発表ハンドアウト 中日理論言語学研究会第1回研究会発表論文集  
(<http://www1.doshisha.ac.jp/~cjt/m-no01.html>)

- 佐野由紀子 (1998) 「程度副詞と主体変化動詞との共起」『日本語科学』3、国立国語研究所、pp.7-22
- 杉村泰 (2008) 「複合動詞「一切る」の意味について」『言語文化研究叢書』7、名古屋大学大学院国際言語文化研究科、pp.63-79
- 須田義治 (2000) 「限界性について－限界動詞と無限界動詞－」『山梨大学教育人間科学部紀要』1-2、山梨大学教育人間科学部、pp.87-94
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房
- 彭飛 (2007) 『日中対照言語学研究論文集－中国語からみた日本語の特徴、日本語からみた中国語の特徴－』和泉書院
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 森山卓郎 (1986) 「日本語アスペクトの時定項分析」『論集日本語研究現代編』明治書院、pp.78-116
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 廖紋淑 (2005) 「局面動詞「～始める」「～続ける」「～終わる／～終える」の用法－先行動詞との共起関係を中心に－」『日語教育』34、韓国日本語教育学会、pp.173-193
- 廖紋淑 (2007) 「内的情態動詞「感情動詞」のアスペクト－「～始める」、「～続ける」、「～終わる」との共起から－」『2007年日語教学国際会議論文集』、東呉大学日本語文学系、pp.438-451